

---

# 初夏の駅

真亜流

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初夏の駅

### 【Nコード】

N7329C

### 【作者名】

真亜流

### 【あらすじ】

電車に乗り遅れてしまったばかりは不思議な男と出会う。ちょっとした話

## 初夏の駅

さよならというように走り去っていつてしまった。

ぼくは呆然と立ちすくんでいた。

次の電車は1時間後。フーツと息を吐く。

人気の無い小さな駅に乗客がいることは珍しいと言っても過言ではない。

2人用のベンチが1つあるだけでタバコの吸殻が押しつぶされた跡が残っていた。

多分清掃もろくにしていなだろう。

暑い………

1人ベンチに座っている男が座っているのに気がつかなかった。

うつむいて居眠りをしているらしかった。

しかたなしに男の隣に腰を下ろした。

赤の他人にくつつくのは好きではない。

ぼくだけではない。

よく見るとみんな離れて座っているのだ。

友達にメールで遅れると書いてそれだけでいい。

簡単なことだ。

「乗り遅れたんですか」男が顔を上げずに訊いてきたのだ。

ぼくは一瞬ぎよっとしたが応じることにした。

「は………はい」

「どこにいくんですか」男はまた訊いた。

「友達の家に」

「ぼくはずっとここにいます。誰か来るとそれは嬉しいのです。」

まあ。1日3・4人しか見受けられませんがね」

ぼくはこの男が何を考えているか分からなかった。

「ぼくに気がつかない人もいます。いや、そのほうが多い。2人つきりだと気まずい。だからその人と親しくなりたいのです。知らない人と仲良くなることは素晴らしいこととぼくはそう思います」

蝉が鳴きだした。

そうなのか。

この人はこんなちっぽけな駅でたまにきた人と何気ない話を生きがいに行っているんだ。

「お仕事は何されているんですか」

ぼくが訊くと男はこう答えた。

「ぼくは普通の会社で働いている人でした」

「ぼくはアルバイトしかやってませんけどね。楽しいですよ」

それから時間いっぱいおしゃべりをした。以外に弾むもんなんだな。

電車が来た。

「じゃ、また」ぼくがいうと男は頷いた。

また、逢えるかな。

窓から見たけどだれもあの男さえいなかった。でも、不思議にこんなこと当たり前と思えた。

（後書き）

二重投稿です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7329c/>

---

初夏の駅

2011年1月27日02時45分発行